

和田家住宅

和田家住宅は、白川郷で最大の伝統的な合掌造りの農家家屋である。江戸時代（1603-1867）後期に建てられたこの家は、何世紀にもわたって荻町の最大の地主であり、世襲で名主の地位にあった和田家の富と地位を反映している。和田家は、焰硝（火薬に不可欠な原料の硝酸カリウム）の生産と取引で、1800 年代後半からは養蚕によって大きな富を蓄えた。1700 年代後半から江戸時代末期にかけて、和田家は白川郷への人や物の出入りを管理する番所の一つを監督する役割を担っていた。

和田家住宅は、他の合掌造りの家屋とは異なる建築的なディテールを持っており、村の外とのつながりを物語っている。一般的な合掌造りの建物は、家畜を飼っていた土間に通じる正面玄関が 1 つだけだが、和田家では、畳の部屋に通じる大きな扉が 2 つある。この扉は、役人などの重要な客が、和田家を訪れる際に専用に使ったものである。また、木造に比べて耐火性に優れた漆喰の土壁や、当時の大都市の建築事情を反映した比較的豪華な畳の部屋なども特徴的だ。

冬の大雪で伝統的な庭の手入れが大変な白川郷では珍しく、家の北側に庭がある。庭の周りには石垣と、庄川の谷を吹き抜ける強風から家を守るために植えられている防風林が並ぶ。